

齋藤榮二先生追悼文集



In loving memory of
PROFESSOR EIJI SAITO

関西大学外国語教育学会

関西大学外国語教育学会 Newsletter 追悼文特集号

齋藤榮二先生追悼文集

関西大学外国語教育学会 編

はじめに

古今東西を問わず、教師と生徒を扱った物語が多数読まれてきました。二十四の瞳、若い人、チップス先生さようなら、最後の授業、今を生きる等、枚挙にいとまがありません。これらは、人は未熟な自分を慈愛で導いてくれる教師にほめられ、しかられ、あこがれを持つことによって成長し、清く正しく美しい恩師と教え子の関係を築いてきたことの証でもあります。齋藤榮二先生も、これらの物語の主人公に勝るとも劣らない教師魂を備えられ、その円満な人格と卓越した教育経験で、多くの優れた教え子を世に送り出されてきたことは、日本の英語教育史に残る歴史的事実です。

そのような敬愛すべき先生が逝去されたことは、日本の英語教育界にとって大きな損失であり、かつての同僚はもとより、多くの教え子にとってこの上ない悲しみであり、関西大学外国語教育学会を代表して、ここに謹んでお悔みを申し上げる次第です。

国家百年の計である教育の在り方は、国民一人ひとりの生き方や幸せに直結するとともに、国や社会の発展の基礎を作る最優先事項であります。現在、世界的規模のパンデミックが発生し、その結果、経済がリーマンショック超の危機的状況にあり、将来が見通せない状況にあります。しかしながらこのような非常時でも、地道に未来を担う人材を育て続けることが我々教師のミッションであり、齋藤先生から受けた恩を世のため人のために返す絶好の機会であると考えます。

齋藤先生、誠にありがとうございました。心より感謝申し上げます。どうぞごゆっくりお休み下さい。

そこで、残されたものにできることは、齋藤先生のご功績を振り返り、生前の先生のご様子はいかに及ばず、研究、教育、授業、個人的思い出、お人柄、語録、ユーモア、揮毫などを後世に残すことで、「人間齋藤榮二先生の生きた証」を未来永劫語り継ぐことにあります。

今回、幸いにもその思いが出版という形で実現することになり、関係の先生方や教え子の皆さんによる「齋藤榮二先生追悼文集」をここに企画・編集させていただきました。その際、こころよく執筆を引き受けていただきました諸先生方、ならびに教え子の皆さんに心より感謝申し上げます。そして、神道美映子氏をはじめ、本追悼文集特別編集委員会の戎妙子氏、近藤睦美氏、山中由香氏の献身的な支えがなかったら、このような追悼文集を完成することはできませんでした。この場を借りてお礼申し上げます。

令和2年3月

吉田 信介（関西大学外国語教育学会会長）

目 次

関西大学大学院外国語教育学研究科 教員追悼文

齋藤榮二先生と二つの書	竹内 理	2
日本英語教育界の扉：齋藤榮二先生	名部井 敏代	4
齋藤榮二先生を偲んで	八島 智子	5
齋藤先生のお言葉	山根 繁	7
齋藤榮二先生、深謝の意をこめて	吉澤 清美	8
「教育とは、機械を造る事ではなく、人間を創る事である」	吉田 信介	9

関西大学大学院外国語教育学研究科 修了生追悼文

齋藤榮二先生とのコミュニケーション	池田 真生子	1 1
齋藤先生のご指導	岡本 清美	1 2
ユーモアの魅力	小林 翔	1 3
Meeting & Interactions	コンダイア クリシュナ	1 5
格闘技同好会会長	近藤 睦美	1 7
齋藤先生への「手紙」	正頭 英和	1 9
平和の礎を築くために	住 政二郎	2 0
齋藤榮二先生の御教えをふり返りつつ	高橋 昌由	2 2
齋藤榮二先生へ	田尻 利恵子	2 3
昔日恩師谆谆教诲铭肺腑，今朝学子悠悠泪水断肝肠	楊 涛	2 5

関西大学大学院
外国語教育学研究科
教員追悼文

齋藤榮二先生と二つの書

竹内 理（関西大学教授・外国語教育学研究科長）

冷に耐え、苦に耐え、煩に耐え、閑（弧）に耐え
激せず、躁がず、競わず、随わず
以て事を成すべし

これは齋藤先生から頂いた書の言葉で、中国清代の政治家で、文人でもある曾国藩が残した「四不四不訣」を書き下したものです。私が研究科長の任に就いたときに頂きました。それ以来、この言葉を座右の銘として、教えを守り続ける努力をしてきました。

齋藤先生の語られる言葉には重みがあります。社会人経験もあり、留学経験もあり、大学や学会の運営経験もあり、さらには小学校から大学院まで、すべての校種で教鞭を執られた現場経験のある先生の人生が、そこに滲み出ているからこそ重みがあるのでしょう。前掲の書も、単に曾国藩が残した言葉ということよりも、齋藤先生がこれを選ばれたということに意味があるように思えます。

先生とは、外国語教育学研究科の立ち上げの仕事をご一緒させて頂き、その後はGP (Good Practice) 事業の申請などを、二人三脚で進めさせて頂きました。前者の研究科の立ち上げに際しては、構想や申請書類の作成、初期の運営などに共にあたるといって、貴重な機会を頂きました。その時の先生のお仕事ぶりは、人の力を信じ、任せるところは任せ、手綱を引くときは引くという、メリハリのあるものだったことを鮮明に記憶しています。博士課程前期課程および後期課程の同時申請という難題のうへ、関大史上はじめての独立研究科設置という状況にあり、諸氏の反対の声も強く、私ごときの力では及ばなかったことも多々ありました。そんなとき、齋藤先生は常に「竹内君、まあ焦らず、気にせず前に進みましょう。そのうち理解してもらえますよ」と、目標の達成を信じて止まないという態度を見せ続けて下さいました。「長たるもの微塵の不安も見せてはいけない」と後に述懐されていましたが、この態度にどれほど勇気づけられたか分かりません。そして、今日の研究科の隆盛を見たとき、先生の慧眼に驚くばかりです。あのときの言葉はその通りとなり、結局は、多くの方々から理解と評価を頂き、見事に目標が達成されているのですから。

後者の文科省事業の申請は、研究科の地歩を固めるためには避けては通れない、苦しい道のりでした。しかしそのときの試みは、「教員養成 GP」および「英語指導力開発ワークショップ事業」の採択だけで終わることなく、e-LINC (英語教育連環センター) として現在も継承されており、長く続く Good Practice として見事に結実しました。この時も、「新設の研究科などに国の事業が取れるはずがない」と、周囲より冷淡な態度をとられたことがありました。しかし、齋藤先生は「計画が良いので必ず採用されますよ」と常に楽天的に事に臨んでおられたことが印象的でした。その楽天的性格に、関与した多くの院生（今では皆さん立派な大学教員になりましたね）が惹かれ、団結したのだと思います。そしてこの時も、先生のお言葉の通りになったのでした。

追悼文特集号

ここに齋藤先生の手になるもう 1 枚の書があります。たしか、学部長の任に就いた頃に頂いたと記憶しています。そこには、

目の前にいる人がたとえ今は敵であっても、
明日からは友に成る人の如く接せよ

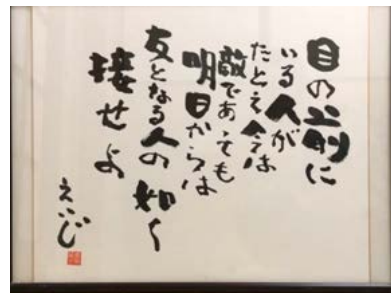
と書かれています。誰から頼まれようが、分け隔てせず受けとめ、どんなに嫌なことでも、腹の立つことでも、また理不尽なことでも、誠意を尽くして最後まで諦めず対応しろ。このような意味なのでしょう。齋藤先生には、「いらち」で「見切り」が早いという、当時の私の弱点が見えていたのだと思います。それ故、私にこの言葉をくださったのでしょう。この書のおかげもあって、なんとか学部や研究科の運営を今日までやってくる事が出来ました。これも先生の炯眼のおかげだと、改めて感じている次第です。

ここまで書くと、齋藤先生は、何か聖人君子のような人だったかのように響くかもしれません。しかし実際は、かなりの現実主義者だったのだと思います(そして、とてもお茶目な方でもありました)。だからこそ、多くの人を惹きつけ、どのような校種でも教鞭をとることができ、しかも置かれたすべての場所で成果をあげられたのだと思います。このような方と身近に接する機会を頂けたことは、私の人生の僥倖でもありました。

先生に関する思い出は尽きません。残念ながら紙幅に限りがあるので、残りの話はまたの機会に譲ることにしましょう。齋藤先生、あなたの教えは確実に研究科の血となり肉となり DNA となり、次の世代にも受け継がれていますよ。本当にありがとうございました。



「四耐四不訣」の書



「目の前にいる人が」の書

日本英語教育界の扉：齋藤榮二先生

名部井 敏代（関西大学教授）

「齋藤榮二先生」を思うと、穏やかにこやかなお顔で振り向く姿が目には浮かぶ。場所は岩崎記念館2階の会議室のドア。私が関西大学外国語教育研究機構に着任して半年ほどたった6月頃のお姿だ。齋藤先生が関西大学に着任されたのは、私が着任する1年前の2002年。竹内先生曰く「幼稚園と高専を除く全ての学校種で教鞭を取られた経験のある稀有な先生」は、教授会でも先生方の尊敬を集め、とても存在感のある先生でいらしかった。一方、私は、そこそこの年齢を重ね、教員免許や学位などの「切符」は手にしていたが、実践的な英語教育経験は殆どない新米だった。この新米が、英語カリキュラムに関する会議で生意気にも「それじゃダメです！」と反論した。ちょうど退室しようとしていた齋藤先生が振り返って見せてくださったのが、私の記憶にあるにこやかな笑顔だ。「がんばれ」と、新しい世界へ扉を開けて招いてくださっているようだった。

実際、日本の学校英語教育に関する私の理解は、齋藤先生によって導かれ深められた。教員免許は持っていたが短期大学の教職課程ではたいしたことは学んでいない。TESOLで修士を取得したが、これもアメリカの文脈での学位である。日本の英語教育に関しては全くの素人だった。そんな私が、今、教職課程担当者・英語教育専門家として活動できているのは、齋藤先生の背中を見て仕事をする機会が与えられたからだと感謝している。

齋藤先生とは、平成17年度教員養成GP、平成17年度・18年度文部科学省委嘱「英語指導力開発ワークショップ」事業への申請準備とそれぞれの事業遂行で、足掛け3年一緒にお仕事をさせていただいた。各事業への申請にあたっては、日本の学校英語教育に関する問題提起や、その問題解決に向けての方策案が盛り込まれるわけだが、齋藤先生を中心としたチームでの議論が、私にとって日本の英語教育をより実践的に理解するスタート地点になった。また、齋藤先生がもつ驚異的な人的ネットワークのお陰で、多彩で実力揃いの講師をGPや英語教育連環センターの講演にお招きすることができた。教育現場をよく知った先生方の講話を通じて私の学校英語教育に関する知見は更に深まった。

実践経験豊かな齋藤先生は、私にとってかけがえのない英語指導法の生き字引でもあった。教職課程科目の英語科教育法を担当するようになると、理屈は話せても実践例が示せない新米は、先生から具体的な指導例を聞き出し、自らの授業で紹介していた。また、公立中学校校内研究授業の講師として講話を準備する時は、齋藤先生からいただく現場の先生方の意識や興味関心に関するコメントがとても貴重なリソースであった。

齋藤榮二先生が居られて、日本の英語教育界という新しい世界での私の模索が始まった。齋藤先生が大切にしていた教育現場を意識する姿勢は、私にとっても大切な目標だ。先生のお姿を心に留めて、教室での学びとその向上を支える英語教育研究を続けること、そしてそうした気持ちや姿勢をもつ学生を育てる努力を、今後もしていけたらと思う。

齋藤榮二先生を偲んで

八島 智子（関西大学教授）

齋藤先生についての思い出は数多くありますが、特に頭に残っているのは、先生のご講演の素晴らしさです。研究科長として、節目節目でお話をされたわけですが、今はスタンダードになっているパワーポイントを使わず、まさに「アカペラ」で、語りかけるというスタイルでした。テクノロジーに頼らないからこそ実現できる効果とでも言いましょうか、心に残るストーリーライン、標準語でもなく、関西弁でもない、ご出身の東北の言葉の影響なのでしょうか、かすかな訛りが温かみのある効果を盛り上げるといえるものでした。しかし、齋藤先生のご講演の魅力は、その語り口ではありません。一番大きな特徴だと私が考えるのは、その歴史性です。外国語教育学研究科長ですから、当然言語や外国語学習の話がされるのですが、むしろ、言葉を使うということの本質を捉え、さらには、外国語を学習するということの意味や歴史性に深く切り込むというのが特徴だと思います。

いつのご講演だったのでしょうか、第二次世界大戦の沖縄戦の話がされたのを覚えています。二つの防空壕で身を寄せていた人々の話でした。一つの防空壕では敵に抵抗した結果全員が殉死したのに対し、もう一つは英語を使える人が、勇気を振り絞り、外に出て命がけで交渉をした結果、全員解放された、という話であったと思います。私は、胸を打たれ聞き入っていました。もちろんその場のすべての聴衆も同様です。ここでは、言葉と人と通じ合おうとすることの大切さに結び付けられたわけですが、重い話題だけに、ひとつ間違えば逆効果にもなりかねない、難しい話であると思います。齋藤先生の誠実な人となりがにじみ出るからこそ聴衆の心を打ったのだと思います。切々と心に響く齋藤先生の語りは、今もなお聞こえてくるようです。

ここで、もう一つ、2007年の2月に刊行された齋藤先生の退職記念論文集掲載の小論で分析させていただいた齋藤先生の講演の一部をご紹介します。

敗戦直後の日本で、駐留していたアメリカ兵に絡まれた日本人女性の話でした。この方は実は齋藤先生が尊敬する古川先生という方なのです。古川先生は、大学受験のための講習会で、アメリカ兵に絡まれるようなことがあった場合には「It's rude of you」と言いなさいと教わっていました。不幸にも、まさにその教えが役立つ状況に出くわしたのです。電車の中でアメリカ兵に絡まれ、手を強くつかまれ動けなくなってしまいました。古川先生は、夢中で、習った表現「It's rude of you」を2～3回叫んだそうです。そのとき、そのアメリカ兵は先生の手をぱっと離れたというのです。（詳しくは齋藤榮二（2002）. 外国語教育学研究科開設記念講演 英語教育改革試案 関西大学 外国語教育研究 第4号 p.1-35. を参照にしてください。）

この話は、齋藤先生のいつもの軽妙かつ暖かみのある語り口で紹介され、次のような説明も付け加えられました。「(アメリカ兵は)アメリカで育ち、アメリカの学校へ通い、アメリカの教育を受けてきたであろう。そのどこかの段階で、rude のもつ意味内容を教えられたに違いない。そしてその rude が使われる状況を経験してきているはずだ。だからこそ rude という単語を耳にしたとたんに手を引っ込めたのだと思う(2002, p.2)。」齋藤先生は、この例を用いて、「ことばの力」について論じられました。

この話を聞いて、私は、なんと見事に、第2言語学習者が人間のコトバの歴史性や身体性を経験す

る瞬間を捉えたものであろう、と感銘を受けました。学校で覚えるべき単語として習った表現が、生きた言葉として機能した、クリティカルな瞬間を捉えています。私は、退職記念論文の中ではこのエピソードをいわゆる neo-Vygotsky 派の応用言語学、社会・文化理論、そして、文化心理学的な観点から第二言語使用と感情の分析したのです。たいていの日本の生徒は教材の中で rude という単語と出会い、辞書で引き、「失礼な、無礼な」と覚えます。つまり、rude というシニフィエ (signifier) を日本語の辞書的「語義」と対応させることをします。そして、多くの英文を読んだり聞いたりする中で“rude” にたびたび出会うにつれて、その人の“rude”の意味の世界は少しずつ広がっていきます。そして、斎藤先生のご講演の中の異文化接触では、英語学習者の女性は“rude”の実践の現場に居合われます。この接触は情動的な葛藤も伴うかなり衝撃的な場であったことは間違いありません。そして彼女が発した“rude”という語は、相手にとって深い意味を想起させたのです。おそらくは感情的な記憶と、斎藤先生が解説されているように、行動に規制が働く規範意識を呼びおこさせたのかもしれませんが。他にも解釈はありえます。戦時下においては、敵国の人々を対等の人間と見ない認知がはびこります。対等の人間以下と思っていた相手から、まるで、昔、母親や、教師から聞いた英語のことばを聞いたとき、相手は人間性を取り戻したのかもしれませんが。この例は、ことばに相手の行動を規制する力が生まれる、言語実践の瞬間を示しています。

この例が示すように、斎藤先生のご講演では、重いテーマを、わかりやすい、しかし感情に強く訴えかけるストーリーとして創りあげるのです。そして、その中に人間教育的な要素が含まれているだけでなく、ことばの習得を研究し教える私たちに、その営みについて深く考える機会を与えてくれるものであったと、今振り返って心から思います。

斎藤榮二先生が率いた外国語教育学研究科はそのご意思を引き継ぎ、ことばとその教育について真摯に取り組むコミュニティであり続けています。私もその一端を担ってきたことを誇りに思います。

齋藤先生のお言葉

山根 繁（関西大学教授）

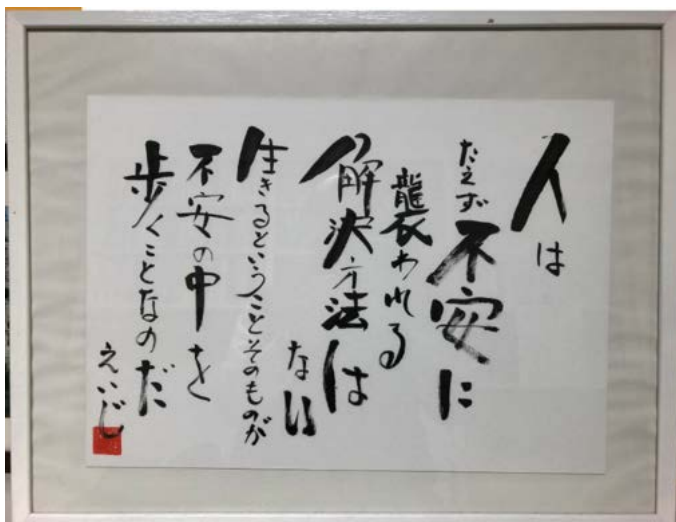
齋藤榮二先生、謹んでご冥福をお祈り申し上げますと共に、先生との思い出をここに記すことで追悼とさせていただきます。

先生と個人的に初めてお話しさせて頂いたのは、2001年の3月頃だったでしょうか。前任校から4月に関西大学に着任予定であった筆者は、大学の保健センターで健康診断を受けていました。この同じ年に着任される齋藤先生も、健康診断を受けられており話しかけて頂きました。筆者は齋藤先生と関西大学の着任が同期という幸運に恵まれたのです。

この年以降、先生がご退職される2007年までの6年間の間、筆者は齋藤先生から多くのことを学ばせて頂きました。特に印象に残っているのは2005年度の「教員養成 Good Practice (GP)」,そしてその後も引き続いて行われた文部科学省委嘱「英語指導力開発ワークショップ」事業、さらに2011年度まで続いた関西大学「英語指導力開発ワークショップ」です。これら地域の学校の英語教員養成のためのプロジェクトを通して、筆者は齋藤先生から多くの学問的刺激を受け、また教育者としてあるべき姿を学ぶことができました。ワークショップで、時にはユーモアを交えて見事な英語を駆使し齋藤先生が高等学校の先生方を指導されていたお姿は、今も強く筆者の記憶に残っています。齋藤先生を中心に、ワークショップに参加されていた先生方と高槻の宿泊施設「高岳館」で夜遅くまで教育談義に花を咲かせたのが今、懐かしく思い出されます。

先生が退職される年に、筆者は左のような額に入ったお言葉を賜りました。今も、研究室の机の前、一番目に付く場所に飾らせて頂いております。

先生は数多のご著書を世に出されましたが、新風舎の『生きるのを励ますことば』に人生を歩んでいくための人生訓を、このような味わい深い温かいタッチで記されています。ご本には左記のお言葉以外にも、たくさんの明言が並んでおり、筆者は度々読み返しております。巻末に「人生はいつまでも挑戦えいじ」というお言葉があります。齋藤先生



は常に挑戦し続けることの大切さを私たちにお教えてくださいました。

先生のご功績に深甚なる敬意を表し、心からご冥福をお祈りする次第です。

齋藤榮二先生、深謝の意をこめて

吉澤 清美（関西大学教授）

『英語授業実践学の展開 齋藤榮二先生御退職記念論文集』（三省堂）の表紙を開けると、巻頭にある先生のご近影が目飛び込んできます。そこには吉澤の記憶に残っている齋藤先生の柔和な笑顔とどのようなことにも前向きに全力で対処し、写真撮影の後、次の課題にすぐ取り掛かりますよとおっしゃっているような先生のお姿が映し出されています。

齋藤先生と初めてお会いしたのは、齋藤先生が関西大学に着任される1年前の2001年4月独立行政法人大学入試センター（DNC）でのことでした。教科専門委員会（英語）と呼ばれる大学入試問題作成に携わるお仕事で1年間ご一緒させていただきました。委員の任期は2年間であり、1年ごとに半減交代となっておりました。齋藤先生は吉澤の最終年に副議長として、次年度には議長として就任されました。教科専門委員会では本試験と追試験を2年間かけて作成し、作成された試験問題は「教科科目第二委員会」と呼ばれる委員会で試験問題の構成や内容、解答、用字・用語などの点検が行われ、更に、「教科科目第三委員会」で形式や表現、各科目間での整合性、重複などの点検が行われました。また、高校教育現場を知る立場の方々も問題の難易度や範囲が学習指導要領から逸脱していないかを確認するため点検協力者として参加していただいております。また、並行して点字問題の作成も同時に行い、専門家による点検を行っていただきました。入試問題作成においては、そのどの段階においても、関係者全員がテストの信頼性、妥当性、公平性が最大限担保できるように全力をあげて取り組んでおりました。

教科専門委員会では問題作成の各段階において、テスト問題の問題点また問題点となりうる点について徹底した議論を行いました。専門委員会では問題作成後、第二委員会、第三委員会など他の委員会からの疑義、コメントに一つ一つ回答しながら、テスト問題の修正を行い、問題の完成度を高める作業をしておりました。専門委員会での毎回の作業は時間との闘いであり、全体の話し合いでは意見が対立することも時にはありました。齋藤先生はその中で英語教育に関する知見と長年の教育経験をもとに、多大な貢献をされ、その重責を全うされました。

ご一緒させていただいた DNC での仕事で一番印象に残っているのは、先生の優しさとユニークな一面です。齋藤先生は小学校から大学院までのすべての教育に携わってこられ、英語教育学分野の重鎮でられました。そのような大先生であるにもかかわらず、普段の先生は穏やかで、思ってもみない時に、「言葉遊び」として駄洒落を言われました。先生の駄洒落を聞くと皆笑顔になり、周りの空気が一変して和やかになりました。専門委員会では、受験生、ご家族、学校関係者に多大なインパクトがある入試問題作成という責務を果たそうと委員全員が時間的制約のある中で作業をする必要があり、緊張が走る場面もありました。齋藤先生の駄洒落はそのような私たちのための先生の優しさのご配慮であったのではと思います。

齋藤先生から関西大学にご着任いただけるということをお聞きしたのは2002年のご就任直前でした。「何とも頼もしい先生」に来ていただけるのだととても嬉しく思ったのを今でも鮮明に覚えております。あれから18年、齋藤先生には研究者として、教育者として、人として多くのことを教えていただきました。本当にありがとうございました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

「教育とは、機械を造る事ではなく、人間を創る事である」

吉田 信介（関西大学教授）

齋藤榮二先生は、英語教育学者として日本の英語教育学の発展に多大なご貢献をされ、関西英語教育学会（KELES）初代会長をはじめ、数多くの要職を歴任されました。ここに慎んで心からの哀悼の意を表し、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

先生とは KELES で初めてお目にかかりました。この学会は「平泉試案」（1974）を受けて、鳥居次好先生のもとに全国の英語教育学者が結集して創設された「日本英語教育学会（1975）」関西支部が改組されて、1997年に発足致しました。それ以来、小学校から大学までの「学校教育」の英語教員のみならず、企業・地域単位の研修会等の「学校外教育」の英語教員が参加し、早期英語教育から生涯学習に至るまで、あらゆる校種を対象とした英語教育学の研究・発表が行われています。

中でも、齋藤会長時代（横川幹事長）に、「関西の三強」といわれた JACET, LET, KELES 共催による「卒論修論研究発表セミナー」が創設された功績は特筆に値します。母校の殻を捨てて、他大学の教員の胸を借り、先生のお言葉によりますと「他流試合による切磋琢磨」を実践することで、関西の大学生・院生・教員が一体となって、ユニークかつ存在感のある他に類を見ない研究大会として、今日まで23年間継続されております。

このような Saitoism とも呼ぶべきスケールの大きな発想と実践は、先生の教育・研究力、人的ネットワーク、行政的手腕、そして何よりも「人徳」によって成し遂げられたもので、そのような大先生から後輩会長としてご指導を賜り光栄の至りです。ここでは「Saitoism 語録」を御披露させていただき、先生の在りし日を偲ばせていただきます。

「使える英語というのは大事なんだけど、使えるだけなら英会話学校だってやれる。人間の心を育てるのが英語教育です。そんな先生いたっけなんていう先生じゃなく、生徒の心の中に残るような教師になってほしい。」

「"Even if people hurt us, we must hurt no one. We must have the courage to refuse to fight back. We must use the weapon of love."は、ガンジーの無抵抗主義の言葉です。これを SV0 の文型ですと教えていいんですか。これこそいじめが横行し、多くの小さな命が絶たれているときに、本当に心にしみ込ませるべきものではないでしょうか。」

「6割の中高生が自分をダメ人間と思っています。これは若者だけの責任にも思えないんです。戦後どのように我々が苦難の時代を生き抜いたかということ、多くの人に語りたがらない。伝えてないんですよ。どういう苦難の道を通って来たかということ。」

「若者が英語教育の火をともしようとしています。どうか先輩の皆さん、こっちから風を入れたり、あっちから扇いだりして、燃え上がるよう力を貸して下さい。」

最後に、齋藤先生から学ばせて頂いたことは、近代教育学の祖ルソーの「教育とは、機械を造る事ではなく、人間を創る事である。」に集約されます。福島に向かって合掌。

関西大学大学院
外国語教育学研究科
修了生追悼文

齋藤榮二先生とのコミュニケーション

池田 真生子（関西大学教授・外国語教育学研究科1期生）

私の博士学位記には、齋藤榮二先生のお名前があります。当時、研究科長でいらした齋藤先生から頂いた最後の学位記です。齋藤先生とは、私が後期課程に入学した2002年4月に初めてお目に掛かり、授業実践学を教えて頂いたり、研究活動についてさまざまなアドバイスを頂戴したりしました。福島ご出身の齋藤先生は、関西弁とは少し異なる柔らかなイントネーションで、いつも温かく私たち学生をご指導くださいました。

進路のことで研究室に相談に伺った際には、大変ご多忙にもかかわらず私の話を長い時間聞いてくださり、齋藤先生お得意のダジャレを織り交ぜながら和やかに、しかし的確なアドバイスをくださいました。（ダジャレは、実は普段から言葉に敏感でなければ、会話の中で使うのはなかなか難しく、さすがは外国語の教育学研究科の長であられると、常々思っていました。）

そして、中でも一番印象的だった思い出は、授業実践学の初回の授業です。受講生は全員が社会人で、外部からの聴講生もいたため、ほとんど顔見知りではありません。その上初回で、特有の少し緊張した空気が流れていたところ、授業担当者である齋藤先生が、英語の授業でもよく取り入れられている自己紹介活動を、全員でやってみようと呼びました。教室の中でペアになりお互いに自己紹介をし、終わったら別のペアと自己紹介を繰り返す、というシンプルな活動ですが、別れ際には「必ず握手をする」というルールを設定されました。自己紹介活動自体は、教師である私たち受講生には親しみのある活動だったため、特に目新しさを感じることもなく、活動を始めました。ところが終わってみると、驚いたことに、想像をはるかに超えてその場の空気が変わり、全員が笑顔になっていました。握手という簡単な行動ではあるものの、両者が同じ場所に居合わせなければできない行動の絶大な効果を、身をもって教わると同時に、コミュニケーション活動の大切さを、たった一つの、それもごくシンプルな活動の実践で教わりました。外国語の授業で多く実施されるコミュニケーション活動は、外国語の上達を主たる目的としていることは言わずもがなですが、そこには必ず複数の人が存在し、相手のことを知り、関係性を築くことに繋がります。この「他者を知り、関係性を構築する」ことは、異文化理解、ひいては平和教育の根底にあるもので、外国語の教育に従事する者として、コミュニケーション活動を通して、学習者にその重要性を伝えることの意義を、齋藤先生から改めて教えて頂きました。このことは、今でも外国語の授業を進める上で、そして後進を育成する上で、私が大切にしていることの一つです。

齋藤先生と一緒にさせて頂いた時間は、修了後を含めてもとても短いものでしたが、たくさんの教えを頂き、そしてそのどれもが、今でもはっきりと記憶に残るものです。人生の先輩として先生が教えてくださったことを、次の世代にこれからもしっかりと伝えていきたいと思います。

齋藤先生のご指導

岡本 清美（外国語教育学研究科3期生）

前期課程の2年間ご指導いただいた齋藤先生は、私の人生で初めての演習指導教員でした。10年以上前に卒業した学部は全くの畑違いだっただけでなく、ゼミに所属しなくても、卒業研究をしなくても卒業できましたので、齋藤ゼミで皆さんの発表や討論を聞いて、そもそも外国語教育学とは、そして研究とは何かをわからずに大学院に進学してしまったのでは、と心配になりました。教職免許もありませんし、初中等教育のことも分かりませんでしたので、齋藤ゼミに参加することがご迷惑ではないのか、とも思いました。

看護学校での指導経験からESPに興味を持っていましたので、看護学と医学の学术论文における使用語彙の違いをコーパスを使い検証すると決めたところ、齋藤先生はどちらも自分の専門とは違うけど、しっかりサポートをするから、と優しく言ってくださいました。研究そのものが初めてであった私にはそれが何を意味するのかが分かりませんでした。後期課程の授業を聴講できるように取り計らって下さったり、ESPや語彙・コーパス分野の研究者の意見を聞くのが良い、と研究途中で学会発表を後押しして下さいました。先生に進捗状況を報告に行くと、すぐ近くにお座りになり、目をつぶって頷いていらっしゃいました。そして、よく頑張っていますね、とにっこり笑って言っていただいたことが思い出されます。

後期課程に在学中、期せずして先生のご出身である福島県にある大学で職を得ることになり、京都外大に移られていた先生にメールで報告すると、大変喜んでくださいました。福島県には縁もゆかりもありませんでしたが、末席の門下生として齋藤先生のお名前を汚してはならない、と頑張りました。震災の翌年には大阪を素通りして福岡の大学に移ったため、関大外教の皆さんとも交流がなくなっていたところへの突然の訃報でした。先生から頂戴した数々のご恩に十分に報いることができぬままお別れとなりました。

齋藤榮二先生、どうもありがとうございました。ご冥福をお祈りいたします。

ユーモアの魅力

小林 翔（外国語教育学研究科 4 期生）

私どもが尊敬してやまない齋藤榮二先生が急逝されてから半年ほどの歳月が流れておりますが、長年英語教育の最前線でご活躍された先生のことは、誰でも昨日のことに思い出されるのではないのでしょうか。私は齋藤先生ゼミの4期生ですが、愛情たっぷりでユーモアあふれる講義をなさる先生のお姿が今も目に浮かびます。今こうして考えますとたくさんの思い出が頭の中をかけ巡ります。

私と先生との出会いは、私が大学4年生の時でした。このまま教師になっていいものかを悩んでいた時、先生のことを知り、すぐに関西大学の大学院へ会いに行きました。初めてお会いした時、終始笑みを絶やさず、私の目をずっと見つめて相談に乗ってくださった温かいお人柄に安心を覚え、すぐに入学を決めました。

先生の著書を読み、研究計画書を準備するにつれて、これまでの自分の根拠のない自信を恥ずかしく思い、一日でも早く先生の下で勉強したい気持ちが強くなりました。先生の著書は、実践的な内容が書かれており、語り口調で英語教師としての本質をわかり易く説明してあります。まるで先生が隣で教えてくださっているかのような錯覚を感じ、授業のイメージがはっきりと湧いてきました。

待ちに待った齋藤ゼミに所属することができ、先生にお会いする機会が多くなるにつれ、誠実で温かいお人柄、英語教育に対する情熱に多くの影響を受けました。「物腰がやわらか」、「ユーモアがある」という表現がありますが、先生の物腰やユーモアすべてが私にとっては魅力でした。その一面を表していると思われるエピソードを4つ紹介します。

1) 一言

研究科長として代表のご挨拶をされる時、司会者が「齋藤先生、最初に一言お願いします。」と言われると、必ず、「あ。一言なので。」とおっしゃり、聞いている人を笑顔にしてくださいました。目を閉じると先生の情熱的なつぶらな瞳と唇元に笑みをたたえた優しいお顔、「あ。」の一言が、いつも語りかけてくださいます。

2) セバスチャン

私の学生時代からの愛称は「セバスチャン」です。先生がこの愛称を研究科全体に広めてくださいました。当時、博士課程に在籍していらした住政二郎さんが、名づけの親ですが、先生は授業中もそれ以外でも私のことを「セバスチャン」と呼んでくださいました。そのお陰で、他の多くの先生方や院生の仲間からも愛称で呼んでいただくことになりました。追悼文特集のお話を頂いた時、編集委員の近藤睦美さんからのメールの宛名も「セバスさん」でした。

3) 授業

齋藤先生の授業で特に印象に残っている思い出は、英語教材の内容を用いたオーラルイントロダクションです。日本の寿司屋で外国人の旅行客が、会計をしようとした際に、日本語で「いくら？」と値段を聞いたら、いくらのお寿司が出され、困ってしまった外国人が今度は英語で「How much?」と

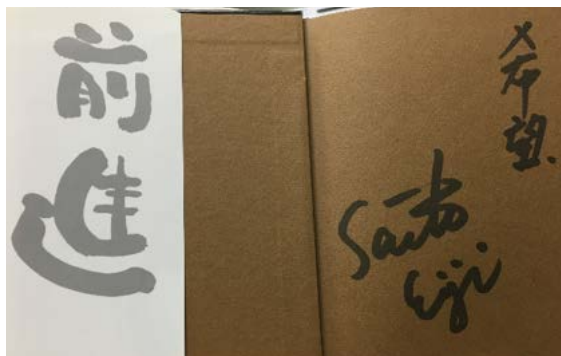
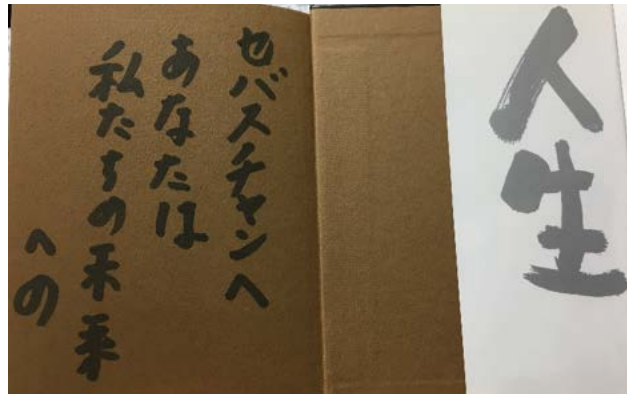
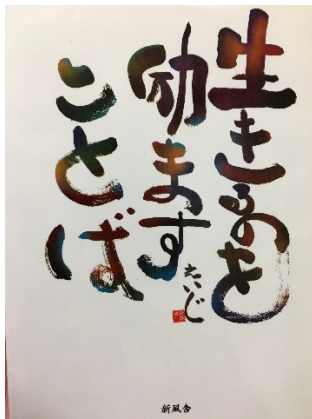
追悼文特集号

聞いたら、なんとハマチのお寿司が出されたという面白い内容だったと記憶しています。ハウマツチ？ハマチ？のように、日本語と英語の音声の違いを強調した話し方、ロールプレイングによる実演などに深い感銘を受けました。このように、いつも優しくユーモアに満ちた先生でしたが、実はお叱りをいただいた事もありました。

4) 厳しさ

私が齋藤ゼミに所属していながら、きちんと断りも取らずに別のゼミの合宿に参加してしまった時です。厳しい態度やご助言がとても身にしみて、その後の私の教育観の大きな支えとなりました。あの時の自分の浅はかさを、恥ずかしく思っております。

私は先生から、英語を教えることだけでなく、人を育てることの大切さを学びました。先生のご著書に直筆でメッセージを書いていただいた言葉は、今も私の宝物です。



思い出はあまりにも沢山で口にも筆にも尽くせませんが、先生をお偲びし、長年お世話になった事を心から感謝申し上げ、お礼の気持ちを込めて筆をとらせていただきました。

いつもにこやかに、静かに、そして情熱的で、ひたむきに英語教育を愛した先生のご指導は、これからは英語科教育史上に不滅の光として輝き続けることを信じ、先生の安らかなご冥福を先生の方々の教え子とともに、心からお祈り申し上げます。

齋藤先生、ありがとうございました。

Meeting & Interactions

コンダイア クリシュナ (外国語教育学研究科 1 期生)

I, Krishna Kondaiyah presently working at Kyoto Municipal Murasakino Senior High School as a certified and tenured English teacher, feel extremely privileged to be given this opportunity to pay my respects to Professor Saito after his sudden demise last year in September. Needless to say the news shocked me. Even such a legend has to pass away – was how I felt. Subsequently, the flood of memories of how we had first met, and how we had interacted thereafter overcame me and shook me into a moment of reflection. The last I spoke to him, I mused, was some four years ago at a conference at the Kyoto University of Foreign Studies.

It was perhaps at Kyoto Municipal Saikyo Senior High School, my previous workplace, where around in the late 1990's Professor Saito paid us a visit in order to observe and guide a former student of his who was putting on a demonstration class as an English teacher that I had my first opportunity to see him. I was struck by the warmth of the professor's persona that radiated to all those he greeted with a smile and a slight bow – and that was to almost all the students and fellow observers in the classroom – one of them being myself. At the conference that followed, packed with English teachers, I found his opening address and later advice to us teachers to be of great importance. He challenged us to find unique ways to stimulate the students into having spontaneous English conversations rather than to overloading them with the details of the English language. In addition, he advised us to keep track of the students' intake of what was being taught – a formidable one he cautioned. All this clicked instantly with me, as I was in the midst of pursuing my Masters in TEFL/TESL at the University of Birmingham, UK. The debate then was over form or function, fluency or accuracy.

Thereafter, I arranged to visit him at his workplace – Kyoto University of Education. He was most affable, and this let me pursue a discussion on the intake of vocabulary per se. After a very illuminating discussion, he offered me the opportunity to audit his classes for the Masters-course students. Delighted and invigorated, I attended many of them for a whole year. It was by far an absolutely eye-opening experience to see how the soon-to-be English teachers were being trained. How privileged I felt!

After completing my own MA in 2001, I consulted Professor Saito who was now the Dean of graduate studies in English education at Kansai University. He of course congratulated me but then quickly prodded me to continue with my research into English language education. This led me to apply for the post-graduate course in English language education at his university to which I fortunately managed to get admitted. Now, I was firmly under the tutelage of Professor Saito.

I took an earnest interest in my research, but lacked in finding a particular single aspect to focus my attention on. Everything seemed to interest me, and I managed to make some

presentations on varying areas at a couple of academic meetings in South Korea and Japan. On hindsight, if it were not for Professor Saito's lead, I would not have done so. He allowed me to experiment and waited patiently for me to find my focus. I really thank him for his generosity. It exposed me to the research of fellow researchers and the world of academic meetings. To further my interest and help me find a focus, he exposed me to how he was going about editing and overseeing the high school English textbooks – an extremely closed off area for many English teachers. I truly felt privileged, again.

Three years passed and I was awarded my certificate sans the doctorate. I was unable, even up to then, to find one single aspect to delve into deeply and thoroughly. I realized, thanks to Professor Saito, that I was more of a teacher than a researcher. I treasured my moments in the classroom more than working on my research presentations. Though I loved to discuss and hypothesize, especially with the professor (which I sorely miss now), my heart was in the classroom with my students. I was still then and I am still now trying to stimulate my students into having spontaneous English conversations. I would like to even go further to suppose that my tutor and friend Professor Saito was himself more of a teacher than a researcher. How encouraged this makes me feel. Thank you sir from the bottom of my heart.

格闘技同好会会長

近藤 睦美（外国語教育学研究科3期生）

この追悼文を書くにあたり、齋藤先生とのこれまでのメールのやり取りを見返してみました。英語教育界の重鎮とこれほど多くのやりとりをする機会を得ながら、そのほとんどが格闘技に関することで、なんとも複雑な思いであります。会員が二人だけの「格闘技同好会」で、どちらが会長になるかをいつも押し問答していたこと、見逃せないボクシングの試合を録画するようお願いしたために、先生が録画していたドラマを消してしまったことなどが、懐かしく思い出されます。

近藤さん

今、アイスクリームの御礼の手紙を書き終わって大学から帰るときにポストに入れて行こうと、していたところでした。メールを開いてみたら久しぶりに近藤さんからの便りでした。不思議なことに私が書いた手紙と近藤さんのメールの共通点は格闘技の話でした。（中略）いろいろな学生諸君と接触がありましたが勤務の大学が終わってもこんなに長い間いろいろとご一緒させていただいたのは近藤さんだけのようになります。またいつかゆっくり話し合える機会があるといいですね。（2014年7月14日、原文ママ）

齋藤先生と「長い間いろいろとご一緒」させていただききっかけとなったのは、私がまだ前期課程2年生だった頃です。当時研究科長だった齋藤先生とはほとんど接点がないまま院生生活を送っていたところ、突然先生から研究室に来ようとお呼びがかかりました。校長室に呼び出される小学生のような面持ちで伺ったところ、突然、チオビタドリンクと先生の論文を渡され、「まあ、読んでみてください」と言われました。今思えばなかなかの恐怖体験だったと思います。その論文は、齋藤先生がこれまでどのように教育者としての人生を歩んできたかをまとめられたエッセーのようなものでした。読み終わると先生は、当時関西大学が文科省より委嘱されることが決まっていた「英語指導力開発ワークショップ事業」で一緒に仕事をしないかと誘って下さいました。私には「NO」の選択はありませんでした。なぜなら、直前に読んだ論文の主題の一つが、「若い時はとにかく何でもYESと言って仕事を引き受けろ」というものだったからです。完全に先生から一本を取られました。

しかし、結果的にはこの出来事は、その後の私の人生への最大のインパクトとなりました。これをきっかけに、私は「とにかく何でもYESと言って仕事を引き受ける」を実践したことで、一院生ではなかなか得られない数多くの学びと出会いに恵まれました。その多くで齋藤先生とご一緒に仕事をさせていただきました。先生が関西大学を退職された後も、異動先の京都外国語大学で複数の科研をご一緒させていただきました。これら一つ一つすべてが、現在大学教員として働く私の礎となっていることは言うまでもありません。齋藤先生からは、英語教育に関わるだけでなく、仕事に対する姿勢やリーダーシップの取り方などを学ばせていただきましたが、何よりも人としてどう生きるかを一番学んだように思います。

誰しもが、人生のロールモデルとなる人と出会えるとは限りません。前期課程2年生のあの春の

追悼文特集号

日、齋藤先生が私を呼び出さなければ、あの論文を私に読ませなければ、今の私を形作る多くの経験や出会いはなかったと思うと、先生には感謝しかありません。

先生からいただいた最後のメールは次のような短いものでした：

近藤さん

ハイ、了解です。近藤さんのためならエンヤーカーラー。(2016年5月11日, 原文ママ)

残念ながら、何にエンヤーカーラーしていただいたのか、はっきりと思い出せないのですが、なんとも齋藤先生らしいメッセージで、思わず吹き出してしまいました。私は今、齋藤先生が関西在住の間、最後に勤められた京都外国語大学に勤務しております。「外大では私の分頑張れ！(2015年8月25日)」と励ましていただいたことを胸に、齋藤先生のようにユーモアを忘れず、多くの人にインパクトを与えられる教育者を目指し、これからも努力を重ねていきたいと思えます。

齋藤榮二先生、格闘同好会の会長は、やっぱり先生にお願いします。私は副会長として後進の育成に努めます。本当にありがとうございました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

齋藤先生への「手紙」

正頭 英和（外国語教育学研究科4期生）

2019年3月。僕はドバイにいました。「教育界のノーベル賞」と呼ばれる世界最大の教育イベント、Global Teacher Prize 2019の表彰式に招待された僕は、初めて踏みしめるドバイの大地の上で、少しだけ過去を振り返っていました。この時、僕は齋藤先生は元気でおられると思っていました。

これは僕から齋藤先生に最大の愛と敬意をこめて書いた「手紙」です。

「齋藤先生。僕のことが見えていますか？この声が届いていますか？あの頃の学びを教師人生の土台にしながら、今日も教壇に立っています。頑張っています。だけど本当は、順風満帆ではありません。苦しいことも、難しいことも、そして悲しいこともたくさんありました。落ち込むことも、涙することもたくさんありました。僕が想像していたよりもずっと、学校の先生って仕事は難しいみたいです。でも、僕の教え子が『正頭先生みたいになりたい』って言って同じ教壇に立ってくれていたりします。こんな僕でも誰かの人生の役に立つことはあるようです。ちょっと照れ臭いし、責任を感じたりもしますが、素直に嬉しいなって思います。

齋藤先生は教壇に立って、こんな景色を毎日見ていたのでしょうか？どんな景色をこの教壇から見ていたのでしょうか？僕もその景色が見てみたいです。そうしたら、齋藤先生みたいにならなう笑っていられるのでしょうか？

僕はちゃんと齋藤先生の教え子として恥ずかしくない「先生」をできているのでしょうか？

齋藤先生。僕は愚かだから、先生の人生の締め切りがわかっていなければ動けない人間だったようです。先生にまだまだ聞きたいことがあったのに、聞けないままに終わってしまいました。自分を情けなく思います。でも、齋藤先生ならきっと『情けないこと言っていないで、行動しましょう。』とお叱りになられることも承知しております。だから僕は、この問いに教員人生をかけて挑戦しようと思います。解答用紙は、僕のこれからの姿です。本当は先生に答え合わせをしてほしかったし、赤ペンでコメントが欲しかったし、ニッコリ笑いながら厳しい評価が欲しかったけど、もう齋藤先生はおられません。ですから、僕のこの姿がどこまでも届くように、これからも前進していきます。必ず届けますので、少しお時間をください。次は締め切りに間に合わせます。」

平和の礎を築くために

住 政二郎（外国語教育学研究科3期生）

最近、学生から提出される課題や英作文がおかしい。授業で指名すると答えはあっているのにしどろもどろになる学生もいる。聞くとパソコンやスマートフォンの翻訳機能を使っているそうだ。何ら入力をせずともスマートフォンのカメラを英文にかざすだけで日本語訳が得られるアプリもある。外国語教育におけるテクノロジー利用に関心を寄せる者としては、「なるほど、そんな使い方があるのか」と感心させられる。創意工夫しながら日本語訳や解答を得ようとする学生の姿には頭が下がる。しかし何か物足りない。

テクノロジーの急速な発展は外国語学習に取り組む学生たちを学習者からユーザーに変えた。学生たちはテクノロジーを使い英文を日本語に変換し、求められる課題に応じて加工する。授業をそつなくやり過ごす「準備」の完了だ。英語と日本語の言葉の壁が瞬時に乗り越えられる過程に「考える」とか「悩む」といったプロセスが介在する余地はない。得られた解答を写し取り、なんとなく分かった気分が学生を満たす。プロセスをスキップすることの効率性を是とする学習観を身体化した学生にわざわざ遠回りすることの大切さを説くのは難しい。

テクノロジーが自然言語を凌駕するなんてあり得ないと数年前まで考えていた。しかし、それは誤りだった。計算機能力の飛躍的向上、人工知能の指数関数的な発展、そしてその応用は外国語でコミュニケーションをする手段を民主化し、そのハードルを極めて低いものにした。外国語でコミュニケーションをすることが完全にフラットになった時、多大なコストをかけて外国語をわざわざ学ぶことなんて時代遅れなのかもしれない。

ではなぜ外国語を教え・学ぶのか。毎日のように更新されるテクノロジーを目の当たりにする度に考える。そして思い出されるのが「外国語教育は平和教育なんですよ」という齋藤先生の言葉だ。第二次世界大戦後、平和への歩みは東西の軋轢の中でゆがめられ、キューバ危機でその脆さを露呈した。世界を巻き込む核戦争は寸前で回避されたものの、人類は核戦争の可能性をリアルに経験した。スライドに映し出されたアメリカによる海上封鎖の画像、そしてキューバ危機を回避するために交渉プロセスと言葉がいかに重要であったかを鬼気迫る様子で関西大学での退官記念講演で語る齋藤先生の姿は未だに鮮明に脳裏に焼きついている。

大学院在学中、「英語指導力開発ワークショップ」や「英語教育連環センター」（e-LINC）の立ち上げと運営を通じて齋藤先生と一緒に仕事をする機会に恵まれた。当時、外国語教育学研究科は競争的外部資金を次々に獲得していた。その分、主要メンバーの先生方の業務量は多く、校務、そして夕方からはじまる授業を終えた後、毎日のように、時には深夜まで会議があった。その中心そして先頭には齋藤先生が常にいらっしゃった。当時まだ院生だった私はサポート業務を任された。今となっては働き方改革で注意を受けるだろうが、授業、業務、そして研究をするために早朝に帰宅することも多くあった。朝早く大学に来られる齋藤先生と岩崎記念館に続く関大の坂道ですれ違い、「おはようございます」、「おやすみなさい」と何度も笑いながら言葉を交わしたことは、今となっては大切な思い出だ。常にユーモアを忘れず、幅広い教育現場の経験に裏打ちされた行動力と言葉にはいつも説得力があった。学内外で多忙を極めながらも、折に触れて私にも声を掛けてくださった。ご自宅で夕

追悼文特集号

飯をご馳走になったこともある。今から考えると「家のパソコンの調子が悪いんですけど見て頂けますか」というのは、先生なりに私の健康を気遣ってくださってのことだと思えて仕方がない。

先生は「問題のない現場はないですよ」とよくおっしゃっていた。教育という営みは人と関わること、これを避けてとおることはできない。人が関わる場には必ず大小の問題が生じる。多くの人が関わる大学ではなおさらだ。齋藤先生は、そうした一つひとつに厭わず、そして惜しまず言葉を尽くされていた。その姿勢から、問題の解決策を見いだすことではなく、問題を紐解くプロセスにこそ人と場の成長にとって大切なものがあることを学んだ。人と向き合い言葉を丁寧に重ね、新しい言葉の芽とまだ見ぬ地平を想像する力を育み、現実をより良いものにして後にのこす。外国語教育をとおして、この連環を絶やささないこと。外国語を学ぶということは、本質的には瞬時に乗り越えたい言語間の参入障壁を縁辺から粘り強く編み直し、少しずつ繋ぎあわせながら新しい世界を構築していくことと教えて頂いた気がする。コストに見合わず時代遅れと一蹴されてしまうかもしれないが、それでも平和の礎を築くには、こうしたプロセスこそ大切なんだよと学生たちには伝えていきたい。



岩崎記念館から望む

齋藤榮二先生の御教えをふり返りつつ

高橋 昌由（外国語教育学研究科2期生）

初めて齋藤榮二先生に私がお会いしたのは研究科後期課程入学前の相談会でした。オーラを感じました。また、さわやかな笑顔の中の鋭い眼光はたいへん印象深いものでした。丁寧な温かいご対応で、親身に入学をお考えいただきました。

その後入学前に、JACET 関西の神戸研究大会で、私は初の学会発表をしました。齋藤先生がなぜか出席されていました、お姿を見るや極度に緊張したのは言うまでもありません。齋藤先生は、私に近寄って来られて、私のRIMOWAのケースを指さされて、「大きな弁当箱ですね。」と笑顔でお声をかけていただきました、緊張が頂点に達しました。

入学の直後に、私のテーマの「家庭学習」について、じっくり報告させていただく機会がありました、書籍や書類が所狭しと山積みされた齋藤研究室で。恥ずかしいことに、博士論文の何たるかを解すことなく、私は縷々申し上げました。それを齋藤先生は、愚を指摘されず、また論難されず、じっくりと聞いてくださいました。その後、博士論文成功に向かう道をお示しいただきました。たいへんな道に突入してしまったと痛感しました。

道といえば、『千里への道』です。そのタイトルの題字は齋藤先生によるもので、そのように名付けられた思いを、齋藤先生はそこに書かれています。齋藤先生の「千里への道」が表紙にあって、私たちを永遠に温かく見守りくださることを強く望みます。

本学会は齋藤先生が設立されました。初代会長の齋藤先生のもとで、私は幹事長を務めました。今でも設立総会の配付文書が手元にあります。その趣意書を書かれたのが齋藤先生です。書いていただくように私がお願いしました、もちろん快諾して書いてくださいました。そこには熱いメッセージが発起人の氏名とともに掲載されています。

齋藤研究室には何かと理由をつけてお邪魔しました、勉強になるからです。齋藤先生はお忙しい中、いろいろとお話してくださいました。教育委員会、教育・研究機関、または大学の動き、今ではbig nameの先生方からのメール、齋藤先生のご苦労話等をお話しいただきました。即時に忘却の彼方に追いやるべき内容もたくさんあったように思います。

齋藤先生のご家族のお話もよく伺いました。いい夫、いい父であられることがよくわかるお話でした。奥様とドライブして行かれる映画館のお勧めなどを私にお尋ねいただいたこともあります。福島のご息様やご同居の娘様のお話も昨日のこのようです。

折に触れ、特に私が不振な時には、詩やご自分が書かれた文章を齋藤先生はおおくりくださいました。それらは齋藤研究室の簡易コピー機で反古を使って眼前でコピーしてくださるのです。深い愛情に感涙して、たいへん勇気づけられ、たくさん学んだものです。

齋藤榮二先生から直々に薫陶を受けたことは私の誇りです。報恩あるのみですし、そのためには、優れた人材を育成して世に輩出することに精励するのみと心得ています。

齋藤榮二先生へ

田尻 利恵子（外国語教育学研究科3期生）

拝啓 夜ごとの虫の音に、深まりゆく秋を感じる季節となりましたが、お元気でいらっしゃいますか。故郷福島での生活はいかがですか？関西で最後に齋藤先生にお目にかかったのは4年前の2月でしたね。お会いするといつも、真っ先に私の母の体調を気にかけて下さる齋藤先生のお気持ちが私の母にも通じているのか、母は元気に過ごしております。私も元気ですよ。

あれから4年、とても充実した教員生活を送っています。初めて入学から担任をしていた子どもたちを卒業させて、今までにない喜びや喪失感を味わいました。そして、英語専科教員として、小学校に異動になり、学級担任の先生と共に外国語科の指導を行なっています。昨年度は、文部科学省英語指導力向上事業である英語教育推進リーダー中央研修に参加させて頂きました。全国からお集まりになった小学校の先生方とつくば市にある教職員支援機構で2週間缶詰め状態で研修を受けました。その研修中に直山先生から心強いお言葉を受講者全員に頂き、小学校英語の教科化に向けてさらに頑張らなければという思いに駆られました。小学校に異動になってから2年間の新学習指導要領移行期も含めて、この4年間は、初めてのことばかりでした。初めてのことにわくわくすることもあれば、なかなかうまくいかないこともたくさんありました。そんな時に、私の心の支えになったのは、齋藤先生からのことばでした。

●「人生はいつまでも挑戦」（原文のまま）

初めての内申書作成、自己申告書の添削、進学相談は子どもたちの進路選択に対する責任が伴い、また、言葉を選びながらのやり取りの日々でした。これまでにない責任の重さを感じたのも事実です。そんな時に、齋藤先生の力強く書かれた筆の勢いに、励まされ、なぜかほっこりした気持ちになりました。

●「熱き心を持って 人を動かすは熱き心ぞ」

中学時代は、とても多感な時期です。社会に出てから周りの人から応援されるような人になってほしいという思いを持って指導をしていましたが、子どもたちにその思いはそう簡単には伝わらない時もありました。困った時の齋藤先生頼み。伝わらなくてもいいから私の思いはとにかく伝え続けようという決心がついたら、随分楽になりました。

●「できないと思ったら絶対にできない できないと思っている人にどうしてで

きる力が湧いてくるんですか」

今年度から実施の学習指導要領では、指導と評価の一体化という視点から、学習改善、指導改善が求められています。自分の考えや気持ちを伝え合う活動を通じて、子どもたちにコミュニケーション能力の基礎となる資質・能力を育成することを目指していかなければなりません。これらのことを小学校の先生方に理解して頂き、実際に授業を一緒に行うとなると、一筋縄ではいかないこともありました。「難しそうですね。」と不安げにおっしゃる先生を前に、どうやったら、「面白そうですね。」

と言っていただけのだろうかと思ひ日々が続きました。答えはそう簡単には見つかりません。私の伝え方が悪かったことを反省して、打ち合わせでは実践動画を視聴しながら指導方法についての共通理解を図ったり、教育雑誌や新学習指導要領の解説を一緒に読んだり、英語でのやり取りを練習して実践に臨んだり…。このように行動できたのは、齋藤先生のお陰ですよ。

今、齋藤先生の著書「自己表現力をつける英語の授業」をあらためて読んでいます。あとがきにこんな一文が目にとまりました。「（この「あとがき」を書いているときにNHKではインフルエンザ・ウイルスの感染爆発に関する特集を組んでいた。）」（齋藤，2008，p.182）その後のパラグラフから、地球規模の問題を解決するためには、国境を超えた人間同士の協力が必要であること、協力するためのコミュニケーションが必須であることが書かれています。その中でのことばの役割を考えていくと、英語の先生の中に英語の力をつけさせるのは何のために？ということを考える人が増えることを願う齋藤先生の思いが伝わってきました。齋藤先生、私がなぜ突然このお手紙を書いたのか…きっと齋藤先生だったら、その理由がわかって頂けると信じてます。

今、世界中が大変なことになっています。前年度の終わりに突然の休校措置がとられ、学校は子どものいない寂しい場所となってしまいました。小学校では4月からの新学習指導要領実施の直前、しかも外国語科導入元年にこんな事態になってしまい、正直、不安しかありませんでした。齋藤先生は、こんな未来が来ることを2008年の時点で予言されていたような気がしてなりません。やっぱり、齋藤先生は偉大な先生です。これまで、そして、これからも。予言だけでなく、私たち教育者をいつも温かく見守り、励まし、そして導いてくださいます。私が大学院生の中から言い続けておられた「スペシャリストである前にゼネラリストであれ。」このことばが、今だからこそ心に響くものとなりました。学校は6月から再開されましたが、新しい生活様式に対応した新しい授業スタイルが求められています。その一つがGIGAスクール構想の実現です。勤務校でもタブレットが教員、子どもたちに一人一台支給されました。これまで以上に子どもたちに寄り添う視点を忘れないようにしないとけないことを日々痛感しています。齋藤先生から頂いた数々の素敵な言葉に励まされながら、子どもたちのために頑張ります！！齋藤先生、この状況を無事に乗り越えることができれば、福島まで会いに行きますね。その日まで、どうかお元気で。

追伸：初めての研究相談中に突然頂いた“おーいお茶”（当時よくお飲みになっていた）のノベルティグッズの写真を送ります。Do you remember?



昔日恩师谆谆教诲铭肺腑，今朝学子悠悠泪水断肝肠

楊 涛（外国語教育学研究科 1 期生）

今天我们怀着沉痛的心情深切悼念我们敬爱的齐藤荣二老师。

追随您从京都教育大学大学院到关西大学外语教育研究科的九年间，您用博大精深的专业知识和严谨的治学态度，深入浅出、幽默轻松的授课风格，为我们传道授业解惑。把我们这些对外语教育一无所知的大学生培养成充满自信，活跃在全国各地热爱外语教育事业的一线工作者。

您德高望重，备受学生爱戴。您和蔼可亲，平易近人，给予学生慈父般的关怀，尤其对我们这些远离故乡家人的留学生们，更是问寒问暖，经常提醒我们注意身体，不让家人担心。您还时常带来各种小点心给我们加餐。

您不停地为外语教育事业奔波，鞠躬尽瘁。为培养更多的教育人才、无数个窗前明月，您奋笔疾书，阅读批改论文；无数个节假日，您在参加完学术会议后，拖着疲惫的身躯赶回大学，只为能听到我们的发表。看到我们小小的进步，您都会心满意足并给予表扬。

您崇高的敬业精神和人格魅力影响着我们。您做每一件事都一丝不苟。您的办公室，如山似海的书籍和资料，被您整理得井井有条；您的教案清晰明了，言简意赅；您的书法遒劲有力，富有哲理，永远鼓励着我们努力工作，生活和学习。

您坦荡的襟怀，高雅的言谈举止，恰似春风般温暖，教给我们做人的道理。您不厌其烦地告诉我们外语教师不只是外语语法的搬运工，而是要让学生学会这门语言，去表达，去交流，去实现和平。您上课时多次引用比嘉平治先生在 1945 年美军侵占冲绳时，勇敢地用英语去交流，救下了 1000 多条性命的故事。此次中国新型冠状病毒肺炎的发生，日本人民倾尽所有并在第一时间把写着“山川异域，风月同天“和”中国加油”的大量医疗物资运往中国，感动了十三亿中国人民。这种以人为本的大爱和气魄不正是您所希望看到的，通过语言的力量和勇敢的善举推动中日友好，并实现世界和平！

青山永在，英名长留！您的音容笑貌和苍苍白发将永远铭记在我们心中！

齐藤老师您一路走好！

并敬请齐藤老师夫人及家人节哀顺变！

編集後記

福島でお元気にされていると思っていた私達に悲しいお知らせが入ってきたのは昨年のことでした。齋藤先生とのいろいろな思い出がよみがえりました。齋藤先生から教員としてだけでなく人間として大事なこともたくさん教えていただいた私達は、今までの感謝の気持ちを伝えたいと追悼文集を計画し、外国語教育学研究科の先生方と修了生から追悼文をいただきました。

春には新型コロナウイルス対応のために突然の学校の休校やオンライン授業への変更などというように私達が全く予想もしなかった状況となりました。こんな時、齋藤先生ならどのようなアドバイスをくださるかなと思ったりしました。授業の準備等に追われ、編集に時間がかかってしまいました。発行が遅れてしまいましたこと、追悼文を書いてくださった皆さまや追悼文集を待って下さっています齋藤先生のご家族に深くお詫び申し上げます。

齋藤先生の一周忌になってしまいましたが、追悼文集が完成しました。齋藤先生に感謝の気持ちを伝えたい人は数え切れないほどおり、この追悼文はほんの一部ですが、齋藤先生との思い出がいっぱい詰まった追悼文集となりました。表紙の齋藤先生のお写真を見ると、今でもあの優しい笑顔で語りかけて下さる気がします。

この追悼文集で、今まで大変お世話になった齋藤先生に私達からの感謝の気持ちを少しは伝えられたかなと思っています。追悼文をお送り頂きました先生方や修了生の皆さま、素敵な表紙の写真をご提供下さいました住 政二郎さんに深くお礼申し上げます。

編集委員 山中 由香 (外国語教育学研究科 1 期生)

齋藤榮二先生追悼文集

令和2年10月31日 発行

編集 関西大学外国語教育学会
表紙デザイン 近藤 睦美
表紙写真 住 政二郎
発行者 吉田 信介
住所 大阪府吹田市山手町3-3-35 関西大学
学会 URL <http://kufler-s.jp/>